

# NEWSLETTER

No.2  
Vol. 42  
2016.3

What's  
New

「馳文部科学大臣視察」

## これから先の浜松医科大学に望むこと





手術ナビゲーションシステム視察(メディカルフォトリクス研究センター※)

What's  
New  
トピックス

## 馳文部科学大臣 浜松医科大学を視察



平成27年10月30日(金)、馳文部科学大臣は、川上科学技術・学術政策局長(当時)、佐野大臣官房審議官(当時)、濱口科学技術振興機構理事長らとともに本学を訪問されました。中村学長から本学の概要を説明の後、森センター長から子どものこころの発達研究センター、児童青年期精神医学講座の研究内容、研究成果を報告しました。

馳文部科学大臣から「本学の研究に期待しています。」とご挨拶をいただきました。引き続き、学内の各研究室を訪問されました。

馳文部科学大臣ご挨拶

### 本学概要説明(中村学長)

平成26年に大学改革機能強化で光医学教育研究拠点形成事業を申請したところ、採択されました。そこで光先端医学教育研究センターを設置し、その中で主に拡散光トモグラフィを中心に更に研究を進めていき、それを第三期に向けて実用化しようと考えております。産学連携を強め、ガバナンスを強化するということを主として申請しました。この機能強化の中では、企業の方、大学院生、医学生を含めて教育していこうという人材育成プランもあります。



中村学長の概要説明

また、イメージングコンプレックス体制の高度化推進事業、これはマイクロからマクロまですべての分野を本学で研究できるような機器を全部準備しました。それを活用して、光トモグラフィ(光CT)基礎的研究と実用化、脳深部の光診断技術の開発、中赤外光(テラヘルツ)の医療への応用と、世界初となる成果をめざしております。

医学生の状況は、平成23年度から静岡県に定着する医師を養成するというので、高校訪問などに力を注いだ結果、入学者のうち静岡県出身者がおよそ60%を占めております。これをきっかけにして毎年80名ほどが静岡県内に定着するだろうと計算しております。

また、医師国家試験の合格状況は、直近の5年間で4回も合格率ランキング上位一桁に入りました。きめ細かに指導することによって好成績を得たと自負しています。

これから、静岡県の菊川市、森町にある家庭



非侵襲画像装置の開発現場視察(産学官共同研究センター※)

医療センターと提携して、総合診療教育に関する組織を設けて医学生を養成していきます。これにより、将来、医師の少ない東部・伊豆・中東遠に医師を派遣することができ、静岡県内に貢献できるものと考えております。

平成27年12月1日から、電子顕微鏡の革命的なことを発表しました本学の針山教授が、「NanoSuit®(ナノスーツ)法—生きたままの生体の電子顕微鏡による“生態”観察」と題して、文部科学省との共同企画展示を予定しています。

### 子どものこころの発達研究センター、児童青年期精神医学講座の概要説明(森 子どものこころの発達研究センター長)

子どものこころの発達研究センターは、本日来学されました佐野審議官をはじめ、多くの方々のご支援で平成18年度に設置され、8月19日の設立シンポジウムでは、馳大臣に特別講演をしていただきました。また今日は、大学へお越しいただきありがとうございます。

平成22年に静岡県からの寄附講座「児童青年期精神医学講座」が設置されました。児童精神を診るということは広いスペースが必要となり、大学病院ではとても間に合いません。それで浜松市子どものこころの診療所(外来治療部門)と国立病院機構天竜病院に50床の児童精神科の病床を設けていただきました。これは、国、県、市が新たな診療システムをつくるという大きなモデルになったということで注目をされました。

文部科学省脳科学研究戦略推進プログラムでは、「浜松母と子の出生コホート」として、0歳

からおよそ1,200名の子どもたちの運動機能発達、認知機能の発達など様々なものを追跡しています。また、装置が不要な診断補助装置Gazefinder(かおてれび)は、お母さんのひざに抱っこして、画面をみるだけで自閉症の診断ができます。1.5歳時健診への導入をめざしています。さらに、陽電子放射断層法(PET)を用いて、症状と関連する脳内物質の異常を探るとともに、栄養学的な予防法の開発を進めています。

国立病院機構天竜病院のデータでは、圧倒的に自閉症のスペクトラムの症例が多く、しかも、虐待を認める子どもが圧倒的に多くて、発達障害、虐待の治療拠点となっています。それから浜松市子どものこころの診療所の初診患者は、平成25・26年には小学生、就学前の子どもが70%を占めています。現在、子どもたちは極めて困難な状況におかれていることがわかります。いじめ対策の事業としては、脳科学、精神医学、

心理学の研究者、学校教育者が集まり、状況を整理しながら一体何が問題なのだろうかということを考えていく全員参加の文部科学省委託事業「子どもみんなプロジェクト」が始まります。



立体型PET-CT装置視察(産学官共同研究センター※)



出生コホート研究の現場視察(子どものこころの発達研究センター)

※現:光先端医学教育研究センター

### 目次

トピックス 1-2

- 馳文部科学大臣 浜松医科大学を視察

研究最前線 3

- Deng ワクチンの開発

公開講座ズームイン 4

- 認知症の理解とつき合いかた

退職によせて 5-11

新任職員の紹介 12

海のもこうで 13-14

- 日独勤労青年交流事業に参加して 13
- ケニアの人々に教わった地域保健 14

大学ニュース 15-19

- 各種行事 15-16
- 学会賞等受賞 17
- サークル紹介 18
- 留学生の紹介 19

寄稿 20

- 論文作成に関する正しい知識の習得及びピアレビューの導入が学生レポートに及ぼす影響

卒業生は今 21-22

- 周りの人に支えられて 21
- 子どもたち、スタッフに支えられて 22  
～小児科看護師としての私の5年間～

#### 表紙の写真

文部科学省情報ひろばで「NanoSuit(ナノスーツ)法—生きたままの生体の電子顕微鏡による“生態”観察」を企画展示

平成27年12月1日～平成28年3月17日



# デングワクチンの開発

## はじめに

本来この「研究最前線」では、筆者の最新の研究成果をご紹介すべきだと思います。しかしながら、我々はデング熱に対するワクチン(デングワクチン)開発の研究を始めてまだ間がないため、本稿では、同ワクチン開発の現状と課題の概説、また関連する疾患と原因ウイルスについて紹介させていただきます。

## デングウイルス感染の広がり

デング熱は、ネッタイシマカ、ヒトスジシマカといった蚊が媒介するデングウイルス(DENV)の感染によって起こる急性熱性疾患で、DENVは媒介蚊の生息域に合わせ、東南アジア、中南米、西太平洋地域など約120ヵ国に常在し36億人以上が感染リスクに曝されているとされている。日本では1942~1945年、長崎、神戸などで大流行したがこれは戦時中に東南アジアから戻った軍用船中のデング熱患者から持ち込まれたものであった。近年、東南アジア、台湾などで年間1万人以上の流行が散発しているが、その傾向にあわせるように日本でも海外渡航で感染し国内で発症する輸入症例が増加しつつあった。そして2014年夏、輸入症例により持ち込まれたと推定されるDENVにより約160例の国内感染が

発生した。国内でのデング熱発生は17都道府県に及んだが、患者の約8割は同時期に都内代々木公園またはその周辺への訪問歴があった。同年9月、都は代々木公園で採集された蚊から実際にDENVが発見されたと発表した。

経済や文化のグローバル化、交通網の発達に伴い、外国との往来が年々活発になり感染症が流行国から非流行国へ流入する機会が増加している。また、地球温暖化は熱帯性感染症が温帯地域でも流行しうる可能性を高めている。DENVの媒介となるヒトスジシマカは秋田、岩手を北限として広く国内に生息している。日本国内各地でいつデング熱の流行が再度発生しても不思議でないと言える。

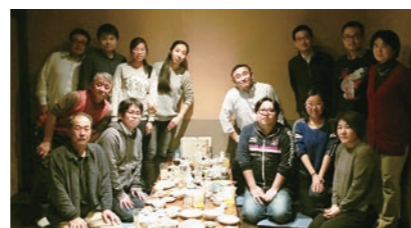
## ワクチン開発の現状と課題

DENVには1型から4型の血清型が存在する。DENVに感染した場合、そのDENV血清型に対しては終生免疫を獲得するが、他の血清型のDENVに対する交差防御免疫は数ヶ月で消失する。つまり他の血清型のDENVに感染し発症しうる。出血熱症状など重症例の多くが二回目以降の感染(一回目とは異なる血清型ウイルスの感染)時に起こることが知られている。すなわち、4種類すべて

の血清型に対して感染防御可能な免疫を獲得することができない場合、ワクチン接種によりかえってデング出血熱が多発する可能性がある。この点がデングワクチン開発における最大の課題である。

昨年(2015年)12月、世界で初めてデングワクチン(フランスS社製)がメキシコで認可された。弱毒の黄熱ウイルス株を基盤として、表面抗原タンパク質をDENV各血清型のもの(下図A; M & E protein)に置換したキメラウイルスから成っている。安全性とある程度の効力(防御効果50-60%)は示されているものの、より防御能に優れた次世代ワクチンの開発も望まれているところである。

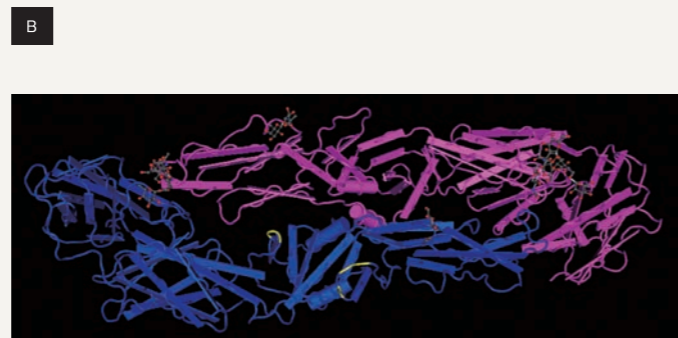
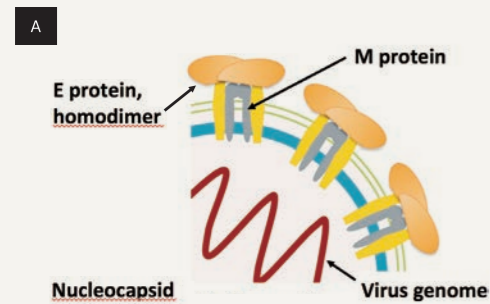
安価で有効性の高いデングワクチンが実用化され、流行国の小児等で集団免疫が実現すれば、高リスク集団での疾病負担が低減するとともに、感染者数が減ればDENVを伝播する蚊の減少にも繋がり地域全体でウイルス感染リスクの低下に資するものと期待される。



昨年12月、感染症学講座(ウイルス学・寄生虫学分野)忘年会にて



感染症学講座  
(ウイルス学・寄生虫学分野)教授  
鈴木 哲朗



# 公開講座

## ズームイン

本学では毎年大学の夏休み期間中に、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。

今年度は「続・健康のために知っておきたい話」をテーマに、3日間(各日2講義)合計6講義を実施しました。その中から特に人気のあった講義をピックアップしてご紹介します。

# 認知症の理解とつき合いかた

認知症とは70以上のいろいろな病気により脳の神経細胞が壊れて起こるひとつの病態(病気の状態)のことをいいます。症状は徐々に進行・悪化する性質があり、日常生活でできることが少しずつ減ってきて、本人と周囲の関係が少しずつぎくしゃくしてくるという極めて社会的な特徴を持っています。



内科学第一講座 教授  
宮嶋 裕明

## 認知機能の低下を何で判断するか

認知症の症状の中核は、もの忘れ、月日が分からない見当識障害、理解・判断力の低下、日常生活に必要な作業ができなくなる実行機能障害などです。これは壊れていく脳神経の症状ですから確実に進行します。そうすると、これらの症状に伴って、「こんなはずではない」とまどいが生じ、徐々に自信がなくなり、不安やあせりから妄想や暴言などのその人らしくない心理・行動の症状がみられてきます。しかし、認知機能の低下を最も反映するのは日常生活動作能力(ADL)です。身の回りの生活をどの程度ひとりで行えるかです。認知症では、中等度になると急速にADLが低下します(図1)。

## 認知症の原因疾患とその特徴的な症状

数年前までは認知症の原因の約半数はアルツハイマー病で、脳血管性認知症、レビー小体型認知症がそれに続くといわれていました。アルツハイマー病の脳をよく調べると、実は血管の異常が必ず見つかります。また、脳卒中の脳ではアルツハイマー病と同じ変化が必ず出てきます。したがって、認知症の原因の7割程度がアルツハイマー病であると現在は考えられています(図2)。

認知症では、原因の病気によって特徴的な症状が早期から中期までに認められます。アルツハイマー病では、財布や鍵などの置き忘れが目立ち、もの忘れに対して

言い訳する傾向があります。愛想は良く他人には比較的穏やかに対応します。脳血管性認知症では、考える速度が遅くなり無気力気味ですが、ゆっくり考えると答えは出てきます。途中で邪魔されたりすると感情的になりやすい傾向があります。レビー小体型認知症では、他人には見えない人や虫などがはっきり見える幻視がみられ、歩きにくさや転びやすさが目立ちます。睡眠中の寝言・大声、あるいは起き上がりというレム睡眠行動障害も多くみられます。これらの特徴を理解して、患者さんとは同じ高さの目線で、正面から向き合うこと、お話しするときは2秒置いて、ゆっくりとやさしく話すこと、ADLの基本である立つ・歩くことを支援することを念頭に置くことが大切です。

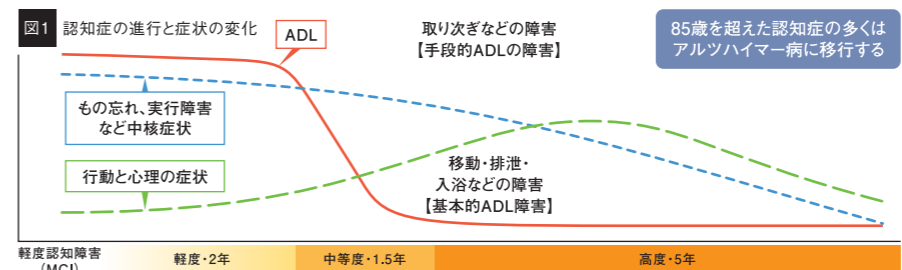
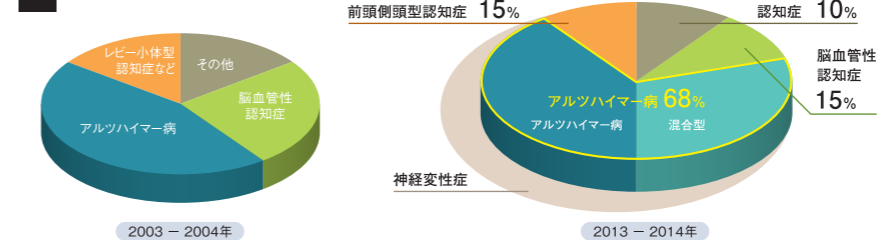


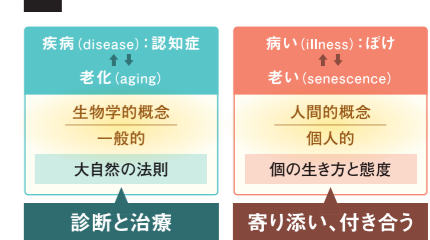
図2 認知症の原因疾患の比較



## 最後に

生物学的には老化すれば認知機能が低下しますから診断と治療という医療の対処になります。しかし、老いに伴う「ぼけ」は個人の生き方や態度に通じます。そこに大切なのは寄り添い、つき合うことだということも確かです(図3)。

図3 認知症とぼけ



## 第2期中期目標・中期計画期間を終えるにあたって

学長 中村 達

平成22年4月から第2期中期目標・中期計画事業を開始した。だからといってこの紙面を借りて6年間に何をしたという自慢話や過去のことを懐古するつもりはない。40周年記念誌を参照いただきたい。このニューズレターの読者は、学生を含む教職員が大部分と思うのでこれから先の浜松医科大学に望むことを書きたい。

### 学生の質の向上

18歳人口が減っていくことは、医学部以外の世界にも波紋を呼んでいるが、コミュニケーション不足やマナーの悪化など質の低下も問題となっており、医学部においても入学定員数の増加により顕在化したことが全国医学部長病院長会議で指摘されている。医学部に入学する難易度は500人に一人であったのが100人に一人の時代になると予測されている。実習の結果をコピーで済ませ、ごまかそうとする学生が増えている。これは「考える」ということを怠っており、まさにこんな学生を医者にするのは罪なことである。教育の環境をハード的なものは当然のこと、ソフト面でも学生が満足できるような対応が大切である。

そのような状況下にあって、本学が第2期のうち、平成22年度から平成26年度までの5年間に医師国家試験合格率ランキングでベスト10に4回も入ったことは立派なことである。第2期最終年度の平成27年度も期待している。教育担当理事の小出先生をはじめ教育熱心な先生方にお礼を述べたい。このことはあらゆる機会に自慢している。文部科学省でのヒアリングで好成績の理由は何かと聞かれたが、「きめ細かな指導をしている」と述べた。一人ひとりの学生にやる気を出させる努力がいい結果を導いたと思う。あるところまで学生がやる気を出したら、あとは自分で頑張る。例えば「グライダーを引いて空に舞いあがらせた後は、自分で風に乗って高く舞い上がり、

好きなところへ舵を取って行く」ようにしてあげればいい。

### 若者を育てる

高等な研究を通して大学の質の向上を図るために、若い研究者の手ほどきを行い、素晴らしい人材を養成することは大学の将来に大きな影響を及ぼす。若い人たちは上司、先輩、師匠を見て育つ。仕事を完遂させるまでには多彩な努力と能力が必要であるし、自分の持っている才能を掘り起し、自分の能力をさらに磨きをかけていかねばならない。まだ報告のないオリジナルなアイデアで、有意な結果を出す。しかし、有意差はないが傾向があるという程度の結果では一般には論文にならない。それでもそこまで到達するために努力したプロセスにおいて試行錯誤して頑張ったものは多いはずである。自分の研究結果が世の役に立ったとき、自分の足跡として生涯残る。この世に自分の存在意義を認識し、感動として記憶に残る。結論を導くまでの過程が素晴らしい体験として若者の身につけているはずである。生涯有用となる知識や技術が身に付き、考え方やセンスも身につけて、行動、態度も変わってくる。

若い研究者が良き師を求めることは大切である。経験の多い師を見本として、自分の進むべき道標となり、方向性が明らかになるからだ。研究にこだわりを持って臨み、ときに失敗もある。失敗は必ず成長をもたらす。失敗から成功に到達するのに、「考える」ということが必要だから、その過程で得ることは多い。若者には考える人間になっていただくよう期待したい。

### 研究に必要な大学の宝

本学で平成26年度に受けた機関別認証評価において、評価員の一人が「感動した」といわれた領域がある。「本学の実験実習機器センター（現在の光先端医学教育研究センター先進機器共用

推進部）では大型先端機器が重点的に設置され、特に大学院教育において高度な技術を持つ教職員により充実した支援が行われている」との評価である。国立大学は数多くあるが、訪ねてみると立派な機器が備わっていても「動いていない」と言われた。すなわち、本学のセンターで研究を支援してくれている人たちにより、機器が「動いている」のである。私は、はじめは高額の研究機器を購入すればいいかと思っていたが、もっとたくさん的高額機器を持っている国立大学では動いていないと言われると、何が重要であるかが分かる。本学のセンターの技術職員は、研究者の、そして大学の宝である。この領域に力を入れることは肝要である。

### 大学を良くする一番の要因

「組織は人なり」と言いますが、大学はまさにそのものである。「教育者ともあろうものが」と言われるような人が居れば、すべてが無意味どころか悪い

影響をたくさんの学生たちに与える結果になる。教育者である教授を選考することの重要性がここにある。私は学長に就任して以来、「インパクトファクターは一定以上あればいい、一番大切なことは人格者であること」と述べてきた。この人格がいいことが最も影響を及ぼすのは教育である。教授が、職員に、教授間で、あるいは医局員に与える影響ももちろん大きい。学生たちに与える影響が最も大きい。大学をよくするには人事がもっとも重要である。

### 本学の将来

現在の国立大学法人経営において、こうでなければという運営・経営の方法は決まりがない。第3期には本学の強み・特色を出して、さらに機能を強化し改革していかねばならない。大学全体を俯瞰できるマネジメント力のある方を育てていくことも重要である。





理事(教育・国際交流担当)・副学長 小出 幸夫

## 退職に寄せて—「サラバ」

西加奈子の小説「サラバ」が気に入っている。この題名は、エジプト人「ヤコブ」と著者のアバターと思われる男子「歩」とが、いつも別れ際に取り交わす暗号のような言葉である。深い響きがあり、現在はその心境でいたいと願っている。

顧みれば、31歳にUCLAでの研究留学から諸般の事情で帰国したものの、研究環境に恵まれず、浜松医科大学附属病院の輸血免疫部講師に採用していただいた(部長は吉田孝人名誉教授)。正直に告白をしよう。当時は腰掛の心算であった。しかし、徐々に居心地がよくなり、それと共に微生物学講座の助教授、教授にいただいた。また、61歳で教育・国際交流担当理事を仰せつかった。すべて予想外の展開であった。今は浜松医科大学が母校のように思っている。理事は8年間、その前の動物実験

施設長(教授併任)は6年間とどうも、僕は何事もただらと長く務める傾向にあるようだ。教授の任にあるときは、日米医学協力の結核班が僕の研究の方向性を確立してくれたと共に、文字通り日本と米国における研究仲間を増やしてくれた。僥倖というしかない。理事を拝命してからは、静岡県内の高校訪問に時間を費やし、県内出身の入学者の増加を図った。これは県内に留まる医師を増やすためである。また、卒業時には医師国家試験の合格率を高める工夫をした。どうも、僕のやることは実利的で深みがない感みがある。この間の詳細な経緯は退職記念誌に纏めた。皆さまに



これを配布する予定なので、ゴミ箱へ直行ではなく、暇を持て余した折には一読いただければ幸甚である。国際交流に関しては、本紙面が限られているので、興味ある奇特な方(いらしたら、驚愕して卒倒するが)は「国際交流後援会誌」(第11号)に掲載した僕の駄文をお読みいただきたい。国際交流活動を通じて、多くの知己を得た。兎にも角にも、これまで国内外そして学内外の多くの皆様方のご厚情に支えられてきたというのが実感である。深謝しながら、「サラバ」である。



理事(評価・労務・安全管理担当)・副学長 鈴木 修

## 皆様に支えられて37年間

私は昭和54年に、浜松医科大学法医学講座講師として赴任してまいりました。教職と管理職合わせると、何と37年にもなってしまいます。私が何故「法医学」という、かくも「珍しい」科目を専攻したか説明しましょう。

私が医学部を卒業し医師の資格を取得し、その当時基礎医学では一番華やかであった生化学の大学院に進学しました。私は夜中まで実験し、必死に頑張っ4年過ぎ、医学博士の学位を取得したのが昭和50年です。その頃は浜松医科大学を含め、多くの新設医科大学ができた頃です。ところが気が付くと私の上に5人もの先輩がいるではありませんか。しかも、他の教室では多くの助教授や講師の先生方が、新設医科大学に赴任しているのに、生化学教室は誰も売れないのです。自分の将来

に不安を感じざるを得ません。丁度その頃、汚い基礎医学研究棟の廊下を歩いていたところ、くだんの浅野 稔先生に声をかけられました。彼は生粋の名古屋人ですから、「おミャーさんヨー、浜松の出身だと聞いたギャー、実はワシ浜松医科大学の教授に内定しとるんだワ。ワシのところに来る気ない?」。私はすかさず「先生、法医学教室で生化学やっていいですか?」と言ってしまいました。それに対して「好きなことスリャーイイガヤ」との回答です。そのためすっかりその気になって「騙されて」しまったのです。その後2年間、にわか仕立てで、検案と法医解剖の訓練をした後に、浜松医科

大学に参りました。私は本来要領の悪い方ですから、次第に法医学にのめりこんでしまいました。その結果、名古屋弁で言うなら「法医のドエリャーオッサン」となり、現在の私が存在するわけです。自分が「騙された」お返しに、4~5人「騙して」、法医学の教授を造ることができました。

科目の印象が芳しくない分、法医学の先生方はいい方ばかりでした。また、浜松医科大学の教職員の方々、特に管理棟に移動した後は事務局の皆様が大変親切に接して下さり、大変感謝しています。正に皆様に支えられた37年間でした。



監事(非常勤) 津田 紘

## 企業経験と現場主義の監事

平成22年のある日、浜松医科大学から監事就任の打診がありました。当時、自動車会社社長を退任し、相談役として次世代技術の研究開発を担当しておりました。同時に地域貢献として3財団の産業支援機関で、産業界のグローバル展開に向けた「企業経営革新や国際標準ISO」の支援を、県内の3大学では「産業連携とガバナンス」や「起業論や経営戦略論」等を客員教授として講義をしておりました。

2年前からは、静岡県の要請で「産業戦略成長戦略会議と産業戦略推進アドバイザー」に就任、地域企業の新事業開拓・開発の支援事業を拡大しました。この事業は、地域産業分野の構造転換とモノづくり革新を狙う意図があります。

浜松医科大学の監事をお受けしたのも、私が製造業で長年経験して得た知識や

技術と人脈の多様性が、国立大学の監事業務と分野が違っても、長年のモノづくり経験は企業感覚と現場主義が、色々な面でお役に立つのではとの判断があったからでした。

監事就任当時は国立大学法人が始動し、第2期の改革本格化で、大学が「ミッション」を核に機能強化を推進する時期でした。監事として私が経験した中で企業と大学の機能や狙いが違って当然でしょう。その違いの大きい点はステークホルダーとの対話関係、パラダイムシフトの捉え方、学内組織運営の重要性や認識等でしょうか。

昨春秋、新たに私はJSTアドバイザー役を受けて、大学の研究意義と成果の重要性を強く認識しました。日本政府は国立大学の研究成果に対し危機感が強く、大学のガバナンスが高度な学術研究のキーであるとして、国費で執行する国際社会の貢献となる研究に最大限注力することを求めています。

これは日本が国際的科学技術研究での存在感とリーダーシップを強める大きな狙いでしょう。これからも、大学の研究が世界で活用されることを期待します。

## お世話になりました

私はこの3月末日で定年退職を迎えます。研究面では、「子どものころの発達研究センター」の設置と「こころの予防医学研究センター」の事業展開を進めてきました。これは教育面の充実にも大いに役立ちました。優秀な人材が沢山育ちました。彼らのおかげで、当科の文部科学研究費の採択率は7割に伸びました。精神科では全国一です。また、摂食障害治療システムは世界最先端を行くものとして広く認知され、当科は「摂食障害治療支援センター」に指定されました。

私の心残りは、この優秀な人材をもってしても静岡県下全域に当科の精神医学を届けきれなかったことです。西部には児童精神科の病棟（国立天竜病院）も外来（浜松市立子どものこころの診療所）もでき、精神科救急システムも合併症治療システムも国内最高水準にあります。中部の精神科医療も非常に高い水準にあります。ですが、東部の整備が不十分です。20年もあったのに、どこで手を抜いたのだろうか。反省しきりです。ですが、縁あって磐田市の病院で診療を続けることになりましたので（福田西病院）、精神病院協会の活動を通して、引き続き静岡県の精神科医療に貢献したいと考えています。長い間お世話になりました。



精神医学講座  
教授 森 則夫

## 高齢者看護・学生・そして私

浜松医科大学医学部看護学科に平成18年6月より勤務させていただきましたが、この10年に満たない期間は本当に「あっ」という間に過ぎました。日本が超高齢社会に突入していく時代の趨勢から「高齢者問題」が日々話題に上らないことがない社会背景の中で、医療にとって今後ますます重要となる老年看護学を担当させていただき、不必要な身体拘束防止等の高齢者の尊厳を支える看護についての研究活動もさせていただきました。

学生さんは高校を卒業したばかりで近寄りたがりの輝かしい表情で未来の薫りを身にまっています。そんな学生さんに「人が老いること」「衰えていくからその成熟」を理解して、病み衰えていく人を心身共に支える看護について理解を深めてもらうことは本当に無謀のように感じました。自身が大学生だった頃を思い起こすと「興味を持てなくても



臨床看護学講座  
准教授 倉田 貞美

当然だよ」と思いつつ、高齢者看護の豊かさを知ってほしいと試行錯誤する年月でした。そんな心配をよそに、多くの学生さんが高齢者特有の「後人への優しさ」に触れ、豊かな感性を駆使して認知機能が低下していても一人の人としてその人の望む生き方を支えようとする看護者としての姿勢を育んでくれました。そんな学生さんたちの何気ない行動・言葉が私にとっての何よりの支えとなって過ごした9年数か月でした。万感の思いを込めて「ありがとうございました」の言葉を記させていただきます。

## 退職によせて

児童青年期精神医学講座は、静岡県の寄附講座として誕生しました。実にわが国で最初の、児童青年期精神医学の独立講座です。

この講座の立ち上げから6年間、特任教授として勤めさせて頂き、こうして無事退職を迎えることができました。わが国のパイオニアとしての働きができたのではないかと感無量です。わが国は少子化にも関わらず、子どもの心の問題は増加の一途を辿っています。その結果、この領域は需給バランスがもっとも悪いものの一つになっています。私の役割は、トレーニングをきちんと積んだ臨床医を1人でも多く育てることでしたが、定年間際になってようやく頼もしい若手医師が増えてきたと実感できるようになりました。

静岡県からは講座の延長が申し込まれており、若手の先生にバトンタッチしてこのユニークな講座は継続します。これだけニーズが高い領域なので、講座が次の世代に恒久化されるのではないかと期待しております。

退職後は1臨床医に戻り、可能な限り臨床を磨いて行きたいと考えております。ありがとうございました。



児童青年期精神医学講座  
特任教授 杉山 登志郎

## ホイホイズとともに

本学に「ホイホイズ」なる職員のソフトボールチームがある。1979年のチーム結成時に、浜松の「H」がついた当時の阪急ブレーブスの帽子を揃えた。チーム名はその「H」で始まる当時一世を風靡したゴキブリ駆除用品に由来する。結局37年もしぶとく生き残った辺りがゴキブリの力だろうか。当初は熱意に溢れ、うまくならない、試合に勝ちたいといった思いの表れが毎週金土の出勤前の早朝練習だった。強制でもなく、皆が自らの意志、意欲で参加した。このことが何事においても（研究でも？）大切なのだと思う。

私は1987年から4代目の監督となった。私の役目は「場の確保」だと自認していた。強くなくてもいいから楽しくソフトボールができる場としてチームを存続させたかった。上下関係に気を遣うことなく、金に縛られることもなく、また実績を挙げることに汲々とする必要もなく、ただソフトボールを楽しむ場。そんな思いでいつしか30年近くも監督業を続けてきた。それもいよいよ終わる日が来る。この先大学という環境の中でホイホイズはどうなるのだろうか。でも余計な老婆心は捨てて、静かにfade outしたいと思う。



感染症学講座  
(ウイルス学・寄生虫学分野)  
助教 記野 秀人

## 精神科事始め

精神科臨床1年目として平成27年4月から病棟勤務、再診外来、当直、外勤先での外来、当直の業務を担当しました。

全てが初めてなので、新鮮でした。病棟はグループ診療で、指導医、研修医と一緒に回診をし、情報を集め、方針を決め実行していく。担当心理士、担当看護師、精神保健福祉士、作業療法医、病棟クラークなど他多数の職種の職員ともチーム医療を進めていく。合併症に対して、身体科の先生にコンサルトしたり、他科入院診療中の患者を診るリエゾンを経験しました。入院（医療保護・任意）説明も法律に基づき行われていました。マニュアルに沿った摂食障害治療・デイケア、電気痙攣療法、森田療法など診療。

外来診療では、児童相談所・学校の職員との情報交換、来院できない患者さんに対して、保健所、事業所の職員との連携で他施設への紹介入院などいろいろ経験させてもらいました。医師・心理士によるクルズス、マンデイクラブ、講演会、フォーラムなどの学習の機会が、豊富にありました。基礎知識も不十分ながら、皆に助けられながら、日々の診療で勉強してもらいました。2年目以降は他施設でさらなる、研修を積んでいくことになります。これからもよろしく願っています。



精神科神経科 診療助教  
伊熊 正光

## 定年という通過点にて

浜松医科大学に診療放射線技師として就職し38年になり、今年度末で定年退職となります。

今まで大病もせず、務めてこられたのも、皆さまのおかげと感謝する思いです。就職した頃からコンピュータの発達とともに装置の進化は早く、アナログ時代のFilmは消え、デジタル化された画像をモニターで診るように変化してきました。撮影の基本は大きくは変わっていませんが、検査は大きく変化し、より詳細な画像が得られるようになり、濃度の調整も可能となり、作製が可能となった3D画像の情報など、画像診断における患者さんへの貢献度がめざましく進歩した時代に仕事をしてきました。また撮影する技術だけでなく接遇面でも、患者さんを安全に、安心して撮影することに気を配り、傾聴することで患者さんとのコミュニケーションを得ることが必要不可欠と考えています。

放射線技師は唯一任せられた線量のコントロールという重要な課題があり、その使命のもとで画像(作品)を作るというやりがいのある楽しい仕事だと思っています。そして、良い作品を作る為には院内スタッフ間でのコミュニケーションがより必要だと感じています。

還暦を迎え定年にはなりますが、仕事半ばで、まだまだ一つの通過点という感じです。継続は力なりといいますが個人的には、マイペースで登る登山(南アルプス)、マイペースなマラソンと献血だけはなんとか続けてこられました。いずれも健康な体が必要ですので、まだまだ衰えないようにこれからも楽しみたいと思います。ありがとうございました。



放射線部  
副診療放射線技師長  
村田 守

## 出逢ったすべての方々に感謝を込めて

新人看護師として入職以来39年間、よく続けてきたと自分を褒めてやりたい。手術室看護師として10年その後循環器内科や外科病棟を経て再び手術室看護師長を6年間、外科病棟看護師長3年間、最後の11年間は看護部管理室の副看護部長として病院再整備、新人教育・現任教育、広報活動・募集活動・組織編成などの管理業務を務めました。

思い起こせば1977年開院前の手術室準備はとにかく忙しく、自分たちでユニホームを決め、各科の手術器械や針糸を選び、手術介助手順書を作り深夜までかかることもありました。私は名古屋大学医学部附属病院手術部に半年間研修後、10人の仲間と浜松医科大学医学部附属病院手術室に配属されました。当時最先端の設備を備えた10部屋の手術室は国内外から大勢の見学者が訪れました。最初の頃は手術が終わらず、手術室で朝を迎えることも多々あったと懐かしく思い出します。



看護部 副部長  
河合 みどり

病院創設期と再整備、2度も病院建設に関わることができ幸せでした。大勢の仲間や患者さん達と出会って別れる、看護に悩み苦悩しそれでも私は看護が好きで好きで、生まれ変わってもやっぱり看護師を選ぼうと思います。やりがいのある39年間でした。私を支えてくれた周りの全ての人に感謝して、ありがとうございました。

## 教えていただいた事

37年前、浜松医科大学衛生学講座 櫻井教授の元に技官として配属され、朝から晩まで実験の日々を過ごした。その中でも印象深いのは、蛍光観察であった。衛生学教室には、自前の蛍光顕微鏡がなかったので、他の講座へ出向き遠慮がちに撮影した。一枚の画像を撮影するには20～30分かかり、気づくと朝方になり、引き続き午前中に、写真屋さんに出向き翌日帰ってくるスライドをみる。やり直しができれば、また一日を費やして写真を撮った。あの頃、顕微鏡から見える暗闇に灯る蛍光の美しさに感服した。

30数年経ち、対象物は違っているもののやはり蛍光観察をしている。しかも生きている細胞内小器官を観察している。撮影時間は、数秒で、画像の善し悪しは瞬時に確認が出来る。変われば変わるものである。年寄りの醍醐味は、この変化を体が知っていることだ。若い人には、



技術部 技術専門員  
柴田 清

決してわからない世界がそこにある。その変化の中に光と影、生と死、変わらぬ命題が、問いを投げかけてくる。あとどれくらいこの問いと闘い続けるのだろうか？それでもヒトである限り、「考えることを怠けるな」の言葉に促され、死ぬその時まで考え続けたいと思っている。さあ、出発だ。準備は、整った。

## 第一病理～腫瘍病理39年 “気合い”不十分

昭和51年7月に、病理学第一講座に文部技官で採用された頃は、附属病院建設中のくい打ち音が響いていました。やがて、借用ブロックの標本作りを頼まれたが、夏の薄切作業は冷房もなく技術力を要しました。5年程過ぎた頃、初代喜納勇教授が実験室にきて「どうだ?」、と聞かれ「ボチボチです」、と答えたら「ドンドンだ」、と言われ「○○機器がないので上手く出来ません」、と返したら「もっと柔軟に対処してくれ」と忠告されました。また、勤務外でも気配りされる先生でした。

そのあと現堀村春彦教授になります。(継承:年度末の医局員フォト…) 遺伝子解析を中心とした研究や教育に数多くの機器類が導入され、技術支援等に携わっています。地域医療や多岐で活躍するバーチャルスライドは、私の活性化業務でもあり長い付き合いになりました。

思えば夕方低血糖になり105号室で、実験用バーナーと珪藻容器でインスタントラーメンを作り食したのは、安全衛生基準が緩い時の一コマです。(現在禁止!) 今までに多くの方々に支えられ、定年を迎えることができることに感謝いたします。39年勤めましたが“気合い”不十分なところもあり、リセットします。有り難うございました。



技術部 技術専門職員

加茂 隆春

## 「やらまいか精神」に生まれ

昭和53年から38年間、大勢の先輩方に仕事のノウハウを教えていただき、大勢の後輩方に支えてもらった大学勤務が終わろうとしております。

浜松医科大学では、学生課学生係を皮切りに医事課、総務課と数多くの係を経験させていただきました。採用時には、怖い上司のもと学生の課外活動支援の仕事をしていただき、まだ体育施設等全てが整備されていない状況の中、プール、武道館、弓道場等が次々と建築され、体育会系の私にとっては学生気分毎日楽しく仕事をさせていただきました。

ちょうど法人化になった年の平成16年10月に上司の勧めもあって浜松の地を離れることとなり、福井高専、金沢大学、鳥取大学と高専、大学を経験させていただきました。初めての単身赴任生活、慣れない地(雪国)での勤務は過酷であり、慣れたところには次の勤務地への異動という短期間でどのように人間関係を構築していくのか悩まされました。(特に遠州弁が全く伝わらない)



事務局 次長  
(総務担当、病院担当)  
長谷川 篤志

定年間に浜松医科大学に戻らせていただき、短期間でしが皆様と仕事できたことを嬉しく思っており、全ての方に感謝しております。

浜松の地に生まれ60年「やらまいかの精神」を持ち、常に「とにかくやってみるか…」的な38年間でした。

## 図書館とともに

昭和54年に本学に採用され、その後図書館に配属となり、以来30年余り図書館にお世話になりました。当初、大学図書館とはいえ、所蔵資料のほとんどが外国雑誌だったため、医学用語の習得もままならず、すぐに業務についていけるかどうか不安でした。しかし、積極的に業務に取り組んでいた諸先輩方の指導を受け、いろいろな研修を通じて、図書館の面白さを教えていただきました。

医学図書館においては、特に迅速な文献提供が第一です。まだインターネットがない頃は、少ない情報を手掛かりに二次資料を丹念に調査し、ようやく所蔵先を見つけ、利用者に文献複写を提供できたときは、喜びを感じました。IT技術が進むにつれ、コマンドを覚え検索したMedline等のデータベースもWeb版となり、文献も格段に検索しやすくなりました。情報量が多くなるとともに、効率的な検索方法が求められ、最善のものを入手する方法を知っていただくため講習会等を企画、開催する機会が増えました。

また当館が事務局となって形成している静岡県医療機関図書連絡会のネットワークを通じ、相互利用をはじめ、地域の病院図書室担当者の方とともに研鑽を積んできたことは、大変貴重な経験でした。

今では電子ジャーナルが多くの資料を占め、ラーニング・コモンズに象徴されるように、主体的に学ぶ力をつける学修支援への機能が重視され、図書館の役割も変化してきています。これからは図書館が情報リテラシーの場として、情報を的確に提供するナビゲート役として、学生の皆さんにさらに活用されることを願っています。最後に定年を迎え、これまで支えていただいた多くの上司、職員の皆様へ心より感謝申し上げます。



学術情報課情報サービス係

係長 夏目 雅代

## 新任職員の紹介

# New Staff Introduction

## 医化学講座 教授 才津 浩智



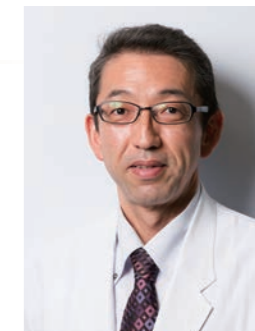
平成28年1月1日付で、医化学講座教授を拝命致しました才津浩智と申します。

私は、九州大学医学部を平成10年に卒業後、産婦人科学教室に入局して3年間臨床研修を行いました。研修をとおして発生や遺伝に興味を抱き、京都大学大学院で形態形成の分子メカニズムの研究を行い、平成18年からは横浜市立大学でヒト分子遺伝学研究、なかでも小児脳神経疾患の遺伝学的解析を行って参りました。

これまでの遺伝子解析では、原因遺伝子のエクソン毎のPCR・シーケンスによる点変異の検出、あるいはマイクロアレイ染色体検査によるコピー数異常の検出が行われていましたが、近年の次世代シーケンサーの登場によって遺伝子解析の網羅性は飛躍的に向上し、また点変異とコピー数異常が同時に解析可能となっております。この解析技術を

用いることで、疾患の遺伝要因の解明が飛躍的に進み、同時に遺伝子診断への臨床応用が始まっております。本学においても、高性能のシーケンサー(NextSeq500)が導入されましたので、その運用・解析に関わり、本学における遺伝子解析研究・遺伝子診療において、微力ながら貢献できるように全力を尽くしたいと思います。何卒ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 泌尿器科学講座 准教授 三宅 秀明



### 【専門分野】泌尿器科悪性腫瘍学/低侵襲手術

平成27年11月より泌尿器科学講座准教授を務めさせていただいております。神戸大学を平成5年に卒業し、そのまま神戸大学泌尿器科に入局しました。その後、大学院入学、国内および海外留学、兵庫県立がんセンターを経て、再び神戸大学泌尿器科で勤務した後に、本学へ赴任致しました。幸い大園教授をはじめ泌尿器科の諸先生方に温かく迎え入れていただき、大変感謝しております。

私が本学でまず取り組むべき課題は、泌尿器科領域におけるロボット支援手術の導入であると認識しています。本稿執筆時点で既に3例のロボット支援前立腺全摘除術を無事施行することが出来ました。これも泌尿器科医師、麻酔科医師、手術室看護師、臨床工学士、事務職員等、準備段階を含めてご協力いただいた全ての職員のお力添え

によるものと感謝しております。今後も前立腺全摘除術に関しましては、着実に実績を伸ばしつつ、保険収載が見込まれております腎部分切除術につきましても来年度早々の導入を目指し、近い将来本学がロボット支援手術の拠点となることを目標に、努力を継続して参りたいと考えております。

紙面の都合上、ロボット支援手術にのみ言及させていただきましたが、その他にも様々な課題に取り組みたいと思っておりますので、今後も職員の皆様にはお世話になる機会が多いかと思いますが、是非引き続きご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

# 日独勤労青年 交流事業に参加して



人事課職員・共済組合係  
川島 名々美



日独合宿セミナー全体集合写真

## 1. ベルリンでの研修

ドイツ側の実施機関であるベルリン日独センター、そしてベルリン市内の事業所2か所を訪問し、ドイツにおけるワークライフバランス(以下WLB)やマイスター制度、後継者確保のための技能継承に対する戦略等について、質疑応答を交えながら講義を受講しました。また、ベルリンの壁やドキュメントセンターなどの史跡や資料館を訪問し、ドイツ歴史上いわば負の面の歴史について、現地ガイドから深い解説を聞くことができ、重く心に残りました。

## 2. ドイツ団員との合宿セミナー

ベルリン郊外のラーヴェンスブリュックにて、当事業のドイツ団員との合宿セミナーを行いました。主としてWLBのテーマの下、日独混成でのフリーディスカッションを行い、日本とドイツの違いについて意見を交わしました。ドイツでは、年次休暇はリフ

日独合宿セミナーディスカッション風景



レッシュするためのものであり、計画的にかつ長期で取得する点、そして、通勤時間・残業時間を含めた労働時間数が日本と比較して短い傾向にある点などに違いがみられました。またドイツ団員は、生みだした余暇時間を社会活動や自己研さん等に充て、自分を成長させることで、より豊かな生活を作り出そうとしている印象を受けました。

## 3. テューリンゲン州での研修

テューリンゲン州は若手人材の確保のために、州全体でWLB政策に積極的に取り組んでおり、ドイツにおけるWLBのパイオニアとも名高いところです。ここでは、企業研修そしてホームステイを体験しました。企業研修では、人材育成方法や社員のモチベーション向上のための取り組み、人事制度などについて質疑応答を交えながら説明を受けました。また、2泊3日のホーム



州教育センターでの企業研修(テューリンゲン州)

ステイでは、ドイツ一般家庭で衣食住を共にし、より密な交流をすることができました。

## 4. 東京での事後研修

11月20日から22日まで2泊3日の日程で、ドイツ団員受け入れの合宿セミナーが東京で行われました。ドイツでの研修を経て、自身の意識や生活に生じた変化や、将来の人生設計などについて日独混成でディスカッションを行いました。日本団員の中には残業時間の短縮を心がけ、家庭での余暇時間を確保しようとしている者や、自己研さんのために語学学習を始めた者があるなど、ドイツでの経験が団員一人一人に非常にいい影響を及ぼしているということを感じました。

振り返ってみると非常にあっという間ではありましたが、内容の濃く、とても充実した研修でした。ディスカッションやホームステイを通して、自分が直接見聞きすることにより相互交流ができたことは、非常に貴重な学びとなりました。今後は、ドイツでの学びを生活にどう活かすか? また、周囲にどう発信していくことができるか? ということ、念頭に置きつつ生活していきたいと思えます。

最後に、今回この事業の参加に際して、お力添えをいただいた本学事務局関係者の方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

# 海のむこうで

Beyond the Sea

# ケニアの人々に教わった 地域保健



医学部医学科5年  
濱野 聖菜

大学で学ぶ医学でないことも学んでみたいの思いから、私は昨年度休学をし、国内外で様々な経験をしました。はじめの1ヶ月は大阪の釜ヶ崎という地域で生活困窮者支援のお手伝いをし、その後、アジアの国を数か国訪問しました。中でもインドには2ヶ月半ほど滞在し、最貧州と言われるビハールで貧困問題に取り組むNGOを訪問したり、インドで西洋医学と並列されているアーユルヴェーダやホメオパシーの医師を訪ねたりしました。残りの半年間は、ケニアのNGOで地域保健インターンとして活動し、年末の休暇にはザンビアの僻地で巡回診療を行う日本人医師を訪ねました。このように、休学中、様々な活動機会を頂きましたが、ここでは、特にケニアでのインターンについて紹介させていただきます。

私が在籍したNGOの活動拠点は、首都ナイロビから約160km離れたマシガ県という地方で、活動内容には教育・環境・保健の3分野がありました。私は保健分野の中の地域保健の担当として、ケニア保健局及び住民との連携による、コミュニティ・ヘルスワーカー(Community Health Worker:以下CHW)の選出・養成に携わりました。CHWとは、医療機関へのアクセスが困難な村において、公衆衛生活動を行ったり、体調の悪い住民を見つけ、必要があれば診療所への紹介状を書くなど、診療所と住民の橋渡しをする住民ボランティアのことです。



被養成者の2人とともに(筆者左)。診療所でのCHW研修にて。



CHWの説明と候補者選出のため、村ごとに行った住民集会の様子。



診療所でのCHW研修にて、看護師(写真左から2番目)がCHW(写真左から1,3番目)にMUACの使い方を説明している様子。  
※MUAC(Middle Upper Arm Circumferences)とは、乳幼児や妊産婦の栄養状態を迅速に判断するためのバンド

持続可能なシステムづくりを目指し、NGOが引き上げた後も、地域に保健活動が根付くよう、完全無報酬のCHW養成を行いました。CHWの養成期間は4週間で、その間、被養成者に対しNGOが提供したのは、昼食と、一番遠い村(会場から13km)に住む人が利用できる会場までの片道ミニバスのみでした。被養成者の中には、毎日3時間弱を歩いて帰る者もいましたが、その殆どが最後まで研修を遂行しました。「他のNGOはお小遣いをくれたのに」と不満を漏らす者もいましたが、自分の村の健康向上のために働く達成感や保健知識を得られる充実感をモチベーションにして、研修をドロップアウトした者は少数に留まりました。このようなCHWの養成を通じて、住民の「自分の村をより良くしたい」と思う気持ちから生まれる原動力に触れ、こちらが全てを与えるのではなく、住民の潜在能力を信頼したサポートの大切さを学びました。

ケニアでは、日本と異なる文化にも沢山出会いました。西洋医学よりも土着



CHW研修にて、コンドームの正しい使い方を木製の模型を使って説明している様子。

の魔術師が信頼されている地域が多く、例えば「歯を抜けば下痢は治る」という教えが人々の中で信じられていました。抜歯と聞く感染等のリスクが頭に浮かびますが、抜歯により下痢が治ったと嬉しそうに教えてくれる住民に出会いながら、認識・信念の異なる地域において、保健活動を行う難しさを痛感しました。また、HIV/AIDSが深刻化する地域で「HIVはコンドームでは予防出来ない」と謳う教会もありました。学校では国語の時間に「HIV/AIDSは恐ろしいモンスターである」といった題材を使い、低学年の子ども達に問題に対する理解を促していました。これらの教育が影響してか、住民からは「急激に痩せた人はエイズだろうから近寄らない」といった声が聞かれ、必要以上に感染者を恐れ排除する様子も見えました。地域医療の向上を図るには、医療のみに焦点を当てるのではなく、その地域に根付いた教育や宗教、文化に沿ったアプローチが必要であることを痛感する毎日でした。

休学中は多様な文化に生きる人々との出会いから多くの学びを頂きました。この経験を活かし、将来は、国内外問わず地域に根ざした医療に携わりたいと願っています。最後に、このような貴重な経験を得ることにご支援・ご協力下さいました先生方、学務課の方々、友人、家族に感謝致します。



10月

10月6日(火)  
慶北一浜松合同医学シンポジウム

「Inflammatory Diseases」をテーマに、第15回慶北一浜松合同医学シンポジウムが大韓民国大邱で開催されました。本学からも多数の教員と学生が参加し、活発な意見交換が行われました。



10月22日(木)  
解剖体慰霊祭

ご遺族、ご来賓、白菊会会員、新天会会員、教職員と学生約500名が参列し、解剖体慰霊祭を執り行いました。医学の発展のため、ご遺体を解剖に献体された故人の御霊に対し、ご冥福をお祈りしました。

10月23日(金) 学生との意見交換会

学生自治会と各サークルの代表者を集めて「学生との意見交換会」を開催しました。

10月31日(土)～11月1日(日)  
医大祭「ONE BY ONE」

医大祭実行委員会主催により第40回医大祭を実施しました。特別講演では聖隷三方原病院精神科部長 磯貝聡先生に「みんなで考えよう! 認知症700万人?!」をご講演いただきました。



11月



11月5日(木)～11月6日(金)  
外国人留学生実地研修旅行

外国人留学生と研究者を対象に、岐阜・福井への研修旅行を実施しました。東尋坊や丸岡城など訪れ、日本文化への理解を深めました。

11月13日(金)  
地震防災訓練及び消防訓練

気象庁による「緊急地震速報」に対応した訓練を行い、教職員、学生が参加しました。東海地震発生を想定し、「午後1時20分地震発生、2時火災発生、2時30分余震発生、内線電話・PHSの使用不能」という状況下で自らの安全を確保しつつ速やかに防災体制に移行するという一連の対応行動を訓練しました。

11月12日(木) 動物慰霊祭

動物慰霊塔前で、約100名の教職員が参列し、動物慰霊祭を挙行了しました。

11月19日(木)  
永年勤続者表彰式

永年勤続者表彰式が執り行われ、教職員9名が勤続20年の永年勤続者表彰を受けました。



11月20日(金)  
学校保健講演会  
「職場のメンタルヘルス」

新たに導入されるストレスチェック制度と職場でのメンタルヘルス対策について、地域看護学講座・巽あさみ教授を講師として講演会を行いました。



11月20日(金)  
医科学シンポジウム

第17回浜松医科学シンポジウムを開催し、学内研究プロジェクト採択者による講演を行いました。

- 高林秀次 助教(動物実験施設)
- 河野雅人 助教(検査部)
- 村松妙子 助教(基礎看護学)
- 佐野真規 医員(第二外科)

11月24日(火) クリニクラウン小児科病棟訪問

クリニクラウン(臨床道化師)を楽しみに待っていた入院中の子どもたちはもちろん、ご家族、職員も楽しい時間を過ごしました。



11月25日(水)  
クリスマスイルミネーション点灯式

市内の民間企業6社の協賛によりクリスマスイルミネーションが点灯されました。



11月26日(木) 学生表彰

- 課外活動 陸上競技部 門脇 慎、高柳奈央  
剣道部 小野田好恵  
水泳部 鈴木浩介、村田茉優、辻ひとみ  
団体 弓道部(男子)、弓道部(女子)、空手道部(女子)、ボート部
- 社会活動 四ツ葉、奇術部、災害支援サークルLuce
- 研究活動 宇多祐介、川口琴子、山本実果、鷲見健翔、鈴木達也、横田菜々子



12月

12月11日(金)  
クリスマスコンサート

学生管弦楽団によるコンサートが行われ、患者さんやご家族が集まりました。



12月21日(月)  
看護学科卒業研究発表会

看護学科4年生による卒業研究発表会を行いました。



1月

1月22日(金)  
共用試験医学系CBT

医学科4年生に、共用試験医学系CBTを実施しました。共用試験医学系CBTは、臨床実習開始前までに修得しておくべき医学的知識を評価する試験で、全国の大学で行われています。

2月

2月4日(木)  
大学院修士課程(看護学専攻)公開研究発表会

修了予定の大学院生13名が、修士論文等の研究発表を行いました。

2月20日(土)  
共用試験医学系OSCE

医学科4年生に、共用試験医学系OSCEを実施しました。試験は実技で行われ、技能と態度が評価されます。

2月25日(木)～2月26日(金)  
浜松医科大学入学者選抜試験

平成28年度浜松医科大学入学者選抜試験(前期日程)を実施しました。

3月

3月2日(水)  
FD講演会

教育活動の一環として、放射線診断学・核医学講座 阪原晴海教授と臨床看護学講座 森恵子教授による「授業における創意工夫について」と題して講演を行いました。

3月10日(木) 消防訓練(夜間想定)

夜間に附属病院5階西病棟で火災が発生したことを想定して、消防訓練を行いました。

3月17日(木) FD講演会

「MCQの問題作成について」と題して、医生理学講座 浦野哲盟教授による講演を行いました。



PRIZE WINNERS

# 学会賞等受賞



賞の名称	受賞年月日	受賞者	受賞内容(研究題目)
The National Alopecia Areata Foundation NAAF-sponsored travel fellowship award	平成27年 8月7日	皮膚科 病院准教授・講師 伊藤 泰介	Autoimmune hair loss alopecia areata and chemokines/cytokines for mediator of inflammation
第30回日本乾癬学会学術大会 鳥居・帝國乾癬研究奨励賞 国外学会発表助成部門	平成27年 9月5日	皮膚科 講師 藤山 俊晴	尋常性乾癬の外用ステロイド/ビタミンD3及びその合剤に対する皮膚湿潤Th17細胞の反応効果の検討
45th Annual Meeting of the European Society for Dermatological Research ESDR/JSID Young Fellow Collegiality Awards 2015	平成27年 9月11日	皮膚科 助教 糟谷 啓	Structural and immunological effects of skin cryoablation in a mouse model
第40回日本医用マスペクトル学会 若手ポスター賞	平成27年 9月17日	大学院医学系研究科(博士課程)3年 解剖学講座(細胞生物学分野) 松下 祥子	前頭側頭葉変性症患者脳内におけるタウリンの濃度および分析解析
第12回日本核医学会 研究奨励賞	平成27年 11月6日	光先端医学教育研究センター 分子病態イメージング 研究室 助教 鈴木 千恵	Preclinical Characterization of 5-Amino-4-Oxo-[6-11C]Hexanoic Acid as an Imaging Probe to Estimate Protoporphyrin IX Accumulation Induced by Exogenous Aminolevulinic Acid
2015 DIA Japan's Inspire Regional Award	平成27年 11月15日	臨床薬理学講座 教授 渡邊 裕司	Outstanding Contribution to Health Award:臨床試験、医薬品開発の体制整備や教育に貢献し、医療の向上に寄与したことにより
第25回日本医療薬学会年会 優秀演題賞	平成27年 11月22日	薬剤部 薬剤師 原内 智慧	細菌性膣炎の妊婦におけるクロラムフェニコール膣錠の血中移行性の定量的評価
第33回神経治療学会総会 優秀賞	平成27年 11月27日	光先端医学教育研究センター 生体機能イメージング 研究室 特任助教 武内 智康	多発性硬化症における活性化ミクログリアの検討
臨床内分泌代謝Update 優秀ポスター賞	平成27年 11月28日	第二内科 医員 鈴木 智恵子	先端巨大症におけるGHRP-2負荷試験の有用性

## 邦楽部

Japanese Traditional Music

### 設立

1975年

### 部員数

5名

### 活動日程

月3回(水曜日)



医学部看護学科3年

松村 高佳

### 伝統をつなぐ

こんにちは、浜松医科大学邦楽部です。私たちは月3回、水曜日の16時30分から福利施設棟2階和室にて活動しています。練習回数が少ないので、他の部活やアルバイトに忙しい人でも続けることができますし、やる気のある人は自主練習で腕を磨くなど、それぞれのペースで活動しています。

現在、邦楽部では箏を中心に練習をしています。箏は「なんだか堅苦しいし、演奏が難しいのでは?」と思う人もいるかもしれませんが、決してそんなことはありません。先生の指導は丁寧で優しく、初心者でも簡単な曲であれば始めたその日に弾くことができようになります。今、所属している部員たちもみんな大学から箏を始めた人たちなので、初心者の方も大歓迎です。

邦楽部は大学創立の翌年に設立されました。附属病院や大学にはOB・OGの方が多くいらっしゃるの、時々声を掛けていただくこともあり、練習の励みになっています。近年は部員数が減少傾向ですが、私たちの演奏で日本の



伝統的な楽器である箏の魅力を多くの人に伝え、浜松医科大学邦楽部の伝統をこれからもつないでいきたいと考えています。

浜松医科大学邦楽部に少しでも興味を持っていただけた方は、ぜひ一度演奏を聴きに和室に足を運んでください。お待ちしております。

## CLUB Introductions サークル紹介

### 女子バスケットボール部

Girl's Basketball

### 設立

1986年

### 部員数

約30名

### 活動日程

週3回(火・木・土)練習



医学部医学科3年

柚木 茉里那

### 交流の幅が広がる部活

こんにちは、浜松医科大学女子バスケットボール部です。私たち女子バスケットボール部は週3回、火曜・木曜は17時~19時、土曜は15時~17時に練習を行っています。部員は、経験者はもちろん初心者も多く、練習内容も基礎的なものを取り入れているので、初心者でも一緒に楽しく練習を行っています。滋賀医科大学との交流戦や、5つの学校が集まって開催する五校戦など、公式戦以外にも他大学との交流・試合を行っており、実践的な練習に加えて他大学の人たちと仲良くなれる機会が沢山あるのが

魅力です。部の雰囲気もよく、学年を超えて仲が良いので、みんなで意見を出し合いながら毎日にぎやかに練習を行っています。また、バスケットボール部は女子・男子バスケットボール部として活動することも多く、合同新入生歓迎会をはじめ、夏にはキャンプやバーベキュー、冬にはスノボ旅行など部活の練習を超えたイベント交流で楽しい思い出を作っています。

浜松医科大学の女子バスケットボール部に少しでも興味がある方は、気軽に体育館に足を運んでくださいね。みなさんとお会いできるのを楽しみにしています。

## 留学生の紹介

仲間や先生方と知識を共有できることが、自分にとって大きなプラスとなっています。

### International Student Introduction

大学院医学系研究科(博士課程)3年 神経生理学講座

Adya Saran Sinha

(アジャ・サラン・シンハ)

出身国

インド



#### Research theme

I am currently a graduate student in the department of Neurophysiology under the able supervision of Prof. Atsuo Fukuda. As part of my graduate research, I am working on the effect of WNK3 Kinase, an enzyme involved in the chloride homeostasis and thereby controlling the nature of GABAergic signaling in a knock out mouse model. I am studying the effects of this gene knock out on the electrophysiological properties of the layer V pyramidal neurons in the prefrontal cortex by means of patch clamp electrophysiology.

#### What did you study before coming Japan?

I have a bachelor's degree in Pharmacy from Manipal College of Pharmaceutical Sciences, Manipal, India. After completion of this course I pursued Master of Science in Pharmacology and Biotechnology from Sheffield Hallam University, UK. During this period I developed a keen interest in neuroscience research and subsequently completed an M.Phil course in

Neurophysiology from National Institute of Mental health and Neuro Sciences (NIMHANS), Bangalore in India.

#### Your original country and its education system

I am from India. The education system in India consists of 5 years in primary school followed by 5 years in secondary school and 2 years of higher secondary school. This is followed by competitive examinations for various streams of higher education. The emphasis during the schooling period is to have a strong foundation in science, mathematics, languages and social sciences. At the higher secondary stage students opt for particular streams namely science, Commerce and Arts and further their education continuing to bachelor's degree in their respective fields of interest.

#### Why did you choose HUSM?

While studying for my M.Phil course in Neurophysiology, I would study a lot of journal

articles and among them I found the chloride homeostasis and its control of GABAergic signaling very interesting. I read some of the research being performed in Prof. Fukuda's lab and corresponded with him regarding my interest to pursue research under his guidance. Prof. Fukuda was very encouraging and after further discussions with him followed by a visit to the lab I decided on pursuing my graduate studies in HUSM.

#### How is your life in Hamamatsu?

I am very fortunate to be learning in a highly research intensive environment as provided by my department and the University in general. I have immensely benefitted from the knowledge shared with me by all my teachers and peers. On a more personal note I have made great friends during my time till now. I enjoy long walks and Hamamatsu seems to me as an ideal place for such exertions.



GABA作動性シグナルに大変興味を持ちました。福田教授の研究室で行われた研究の論文をいくつか読み、福田教授のもとで研究したいと直接連絡をしました。福田教授はとても心強い存在で、初めて研究室を訪れディスカッションをした後、私は浜松医科大学の大学院で研究することを決めました。

#### 浜松での生活はどうですか？

研究室と大学の研究集約型環境で研究ができ、私はとても幸運だと思います。仲間や先生方と知識を共有できることが、自分にとって大きなプラスとなっています。また、いままでに素晴らしい友人にも恵まれました。私は散歩をよくしますが、浜松はこういった運動に適した場所だと思います。

(NIMHANS)でM.Philコース(神経生理学研究科)を修了しました。

#### 出身国(地域)はどんな様子ですか？ 教育事情は？

私はインド出身です。インドの教育制度では、初等学校5年、中等学校5年、上級中等学校2年となっており、その後、高等教育に向けての受験競争となります。

学校教育では、科学、数学、語学、社会科学における基礎知識の習得を重視しています。上級中等学校では、学生はそれぞれ科学、商学、美術といった興味のある分野を選択して学び、学士号の取得へと進みます。

#### 浜松医科大学に来たきっかけは？

M.Philコースで神経生理学を学んでいる間、たくさんの学術論文を読みましたが、その中でもCl-ホメオスタシスとそれをコントロールする

## Special Feature

### 寄稿

## 論文作成に関する正しい知識の習得及びピアレビューの導入が学生レポートに及ぼす影響

医学部医学科2年 山本 実果

私達大磯ゼミは、昨年7月に行われた第47回日本医学教育学会大会の学生ポスターセッションにおいて2つの演題を発表し、ともに優秀演題賞をいただくことができました。今回は2演題のうちの1つである「論文作成に関する正しい知識の習得及びピアレビューの導入が学生レポートに及ぼす影響」という研究について紹介したいと思います。

近年、論文作成における剽窃が大きな問題になっています。これは学生のレポートについても同様で、教育現場では当然これを防ぐ必要があります。しかし、我が国の中等・高等教育では、レポートの書き方を学ぶ機会がほとんどありません。本研究では、適切な教育介入が学生レポートに及ぼす影響を明らかにすることで、より良い医学教育の方法を模索しました。

本研究の対象となったのは、大学生になって間もない1年生たちです。レポートを3回にわたって提出してもらい、異なる介入がレポートに及ぼす変化に着目しました。介入としては正しいレポートのフォーマットを提示する『①書き方講習』と、レポートを正しく書くように注意喚起することを目的とした『②ピアレビューの説明と告知』を行いました。第3回レポート提出後、実際にピアレビュー(学生間の相互評価)を行い、最後に学生全員を対象にレポート不正に関するアンケートをとりました。

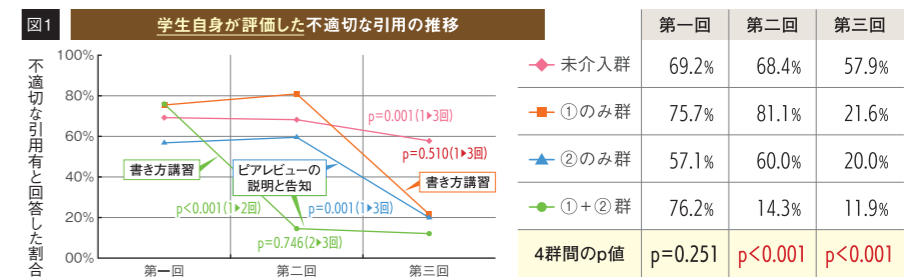
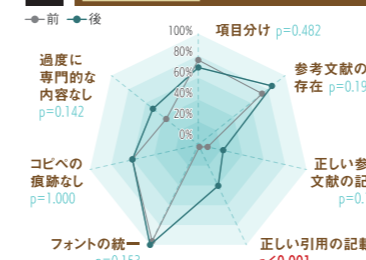


図1は最後のアンケートで3回のレポートそれぞれについて不適切な引用等を行ったと自己申告した学生の割合を介入方法別に示しています。矢印は介入を行ったタイミングを示していますが、見ての通りいずれの介入を行っても意識的に不適切な引用をした学生の割合は大きく減少していることがわかります。

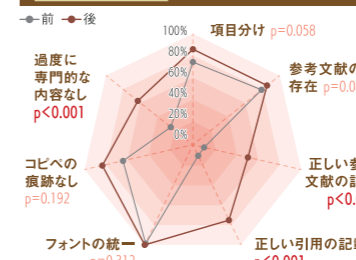
しかし、私達ゼミ生があらかじめCITI JAPANにおける剽窃の定義を参考に設定した項目の下で学生のレポートを評価したところ、『ピアレビューの説明と告知』には適切なレポートを書こうとする動機付け効果が、『書き方講習』にはそれに加えて正しい書き方を習得する効果もあると考えられることがわかりました。(図2)

以上の結果より、学生がレポートの書き方を知らないことが不適切な引用等の原因となっていると考えられます。これに他のアンケート結果を加味すると、大学入学早期にレポートの書き方講座を行うことが最も大切で、それに加えてレポート

#### 図2 研究班が評価したピアレビューによる改善率



#### 研究班が評価した書き方講習による改善率





◀心臓麻酔の経食道心エコー中。心臓の手術は体の変化がダイナミックで面白いです。

▼職場の集合写真。仕事を続けられるのは皆さんのおかげです。



医学科27期生(平成18年3月卒業)  
藤井 範子

## Alumni News 周りの人に支えられて

みなさん、こんにちは。私は2006年3月に浜松医科大学を卒業し、東京大学医学部附属病院での初期研修を経て、2008年4月より東京都立多摩総合医療センター麻酔科シニアレジデント、医員として現在まで勤務しております。

私は学部生時代から“自分が医師になる”ということに疑問を感じ、就職活動中も医師以外の職に就こうかと真剣に考えていました。とりあえず始めた初期研修も仕事がつきつ“やめたい”と思う日々でした。医師を続けようと思ったのは、麻酔科の必修研修の時でした。人体の手術に対する反応とそれに対応し患者

を守る麻酔科医。人体の反応はとてもダイナミックかつ繊細で、その変化に寄り添える手術麻酔の仕事は大変興味深く、ようやく前向きに仕事ができるようになりました。そして“手術麻酔のプロになりたい”と、強く思うようになりました。

厳しい環境で研修をしたいと思い就職した東京都立多摩総合医療センターは、救急医療・がん医療・周産期医療を重点医療としており、それに関連した緊急手術が多い施設です。また外科系も充実し、近隣に都立の小児病院、神経病院があるため、様々な症例を経験することができました。研修3年目に麻酔科標榜医・認定医を取得し、多忙な手術室でやっと仕事を1人でこなせるようになりました。そんな時に妊娠がわかりました。

女性医師にとって結婚、出産はひとつの悩みではないでしょうか？実際、妊娠が判明してから、透視が必要な手術には入れなかったり、当直を免除していただいたり、今まで普通にできたことが、周りの力を借りないとできなくなりました。申し訳ない気持ちでいっぱい、5ヶ月過ぎまで当直をしましたが、やはりおなかが張ってしまい継続は困難でした。産後半年で復職するも、当直はできず、子供の体調不良のため急に休むこと多くありました。妊娠前と同じように勤務できないうえに、育児と家事で自分の仕事量は明らかに増え、両立の生活はきついものでした。



▲11月に出産し、3人娘に振り回されています。

さらに復帰から1年経った頃、第2子を妊娠しました。専門医試験受験の年だったため、仕事と育児と家事と受験勉強とさらに大変になりました。しかし“次はいつチャンスがあるかわからない”と必死に勉強し、ほぼ臨月での試験も何とか乗り越えることができました。再び半年で復職しましたが、学年が上がるにつれて仕事の責任が増し、両立の生活に限界を感じることも度々ありました。何度も“辞めよう”とか“働き方を変えよう”と考えるようになりました。その一方で、“もっと勉強したい”とか“責任をもって仕事をしたい”という気持ちもどんどん強くなり、自問自答の日々が続きました。その時に“手術麻酔のプロになりたい”と決意した過去の自分のことを思い出しました。悩んだ末、後悔したくない気持ちが強くなり、なんとか両立の生活を継続しています。

最後になりますが、今日でも女性医師の仕事と育児の両立は困難が多く、やめてしまう人は少なくありません。女性医師が働き続けるには、労働形態の改善も必要かもしれませんが、私たちが周りに甘えず努力をし続けなくてはならないと思います。私が医師を続けることで、次世代の女性医師が少しでも良い環境で働けるようになればいいと思います。ママ女医のみならず、一緒に頑張りましょう！

# Alumni News 卒業生は 今

▼患者さんの笑顔から元気をもらっています!!



癒される瞬間▶



## Alumni News 子どもたち、スタッフに支えられて ~小児科看護師としての私の5年間~

看護学科13期生  
(平成23年3月卒業)  
佐藤 有紀

幼稚園の頃から夢だった小児科の看護師さん。実際なってみると辛いことも沢山あったけれど、子ども達の笑顔に支えられて、子ども達の頑張っている姿に励まされ、看護師になり、小児科病棟で働いて早5年が経とうとしています。

私は平成23年に浜松医科大学を卒業後、そのまま浜松医科大学医学部附属病院の小児科病棟に就職し、看護師として勤務しています。小児科病棟は生後数日の小さなベビーにミルクをあげたかと思うと、成人患者さんの呼吸器を管理し、手術のお迎えに行ったり、化学療法をやったり…と、0歳～大人まで入院し、かつ内外科問わず様々な科が混在する多様な看護ケアが必要となる病棟です。その分、5年経った今でも慣れないケアに戸惑うこともあるけれど、今でも学ぶことの多いとてもやりがいのある現場です。

浜松医科大学の小児科病棟は、たんぼぼ学級という院内学級が備わっています。また、病棟内にはプレイルームもあり、保育士さんも常勤しています。病気を治す場であると共に、子ども達の生活の場、成長



▲子どもたちの遊び場プレイルーム

発達を促す場であり、私たち看護師も患者さんの遊びや学習面にも配慮した看護を目指し日々子ども達と関わっています。また、長期入院となる患者さんに対しては、合同会議という学校側と医療者側が退院後の生活について細かく決定していく話し合いの場を設け、退院後の不安や戸惑いを少しでも軽減できるように復学支援を医師と協力して行っています。

私は今までプリセプターを2回、現在は病棟の教育リンクナースを担当させてもらっています。今年度は臨床指導者研修にも参加させてもらいました。毎日新人さんや学生さんと向き合う中で一番感じることは、自分自身も後輩達に学びながら看護をしているということです。人へ何かを教えたりすることが苦手で、今まで避けて通ってきた私にとって、後輩を育てていくということは、自分の中でも大きな挑戦でもありました。色々な先輩から技を盗もうと先輩の話を聞き、時には自分の思いだけが先行してしまい涙が出てしまうこともありながら、後輩達と向き合ってきました。現在、当病院ではパートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)制度が取られており、私が1年生の時よりも、看護師間での先輩・後輩関係が濃密なものになったと思います。その分、1年生の自立を促していくのはとても難しいと感じています。しかし、自分も一緒に模索しながら後輩達と働く中で、1年生が一生懸命患者さんと向き合っ

真剣に看護を行った結果、何かを得ることができた時、それは私自身が成功した時以上の喜びへと変わります。皆さんご存知の通り、看護師という職業はやりがいがある分、その責任がとても重い職業でもあります。自分の判断や言動が患者さんの命に繋がることもあります。患者さんのためにも、また自分たちのためにも、責任感があり、患者さんの声に耳を傾けられる看護師でありたい。その思いが後輩達へ伝わっていくような病棟作りを今後も目指していきたいです。

小児科病棟は若いスタッフが多いですが、その分パワフルで子どもと関わる中で優しさにあふれた病棟であると感じます。看護部主催の全病棟対抗ドッジボール大会では、小児科病棟もご優勝に輝く団結力も見せました!!患者さんの喜びと一緒に笑顔になり、患者さんの悲しみに一緒に涙が流せる、そんな病棟スタッフの皆さんに囲まれた職場で働けていることに心から感謝します。病氣と闘う子ども達に負けないように、私も毎日を大切に!!頑張ります!!



▲ドッジボール!!優勝ーっ!!

# 文部科学省情報ひろば 浜松医科大学企画展示・サイエンスカフェ

文部科学省内に設置される広報スペース(「情報ひろば」「ラウンジ」「2階エントランス」等)を活用した大学・研究機関等との共同企画広報に参画しました。展示会場に来ていただいた皆様には、アンケートにご協力いただき誠にありがとうございました。(平成28年2月現在、335名の方からご意見をいただきました。)

## 企画展示

表紙で展示風景を紹介しています。

**開催日** 平成27年12月1日(火)～平成28年3月17日(木)

**概要** NanoSuit法は、生きたまま、あるいは濡れたままの生物試料を高解像度電子顕微鏡で観察可能にする技術です。

**テーマ** NanoSuit®(ナノスーツ)法ー生きたままの生体の電子顕微鏡による「生態」観察

高分子を含む水溶液をサンプルにつけ、よく拭いたのちに、電子線またはプラズマを照射することで生物試料全体にナノ薄膜を形成させます。このナノ薄膜によって、生命体に含まれるガスや液体成分が真空によって奪われることから防ぐことができます。これが宇宙服のような機能をもつことからNanoSuit®と命名されました。

### 主な展示物

#### ■パネル

- ・NanoSuit法の技術を発明・発展させた経緯
- ・細胞や組織の超微細構造の静止画像

#### ■映像

- ・NanoSuit法発明の緒となった、シヨウジョウバエ幼虫の電子顕微鏡内で動いている動画
- ・超微細構造、シヨウジョウバエの粘液を規範としたNanoSuit溶液によって生命維持に成功した蚊の幼虫(ボウフラ)の動画
- ・電子顕微鏡の操作法

実は、これまで高真空を必要とする電子顕微鏡観察では、真空に耐えるため生物を事前に化学固定して脱水処理して観察していました。イカにたとえると、干物のイカ(スルメ)を観察して、生のイカを想像していたこととなります。スルメと生のイカの姿には大きな隔たりがあります。光学顕微鏡よりずっと解像度の勝る電子顕微鏡で生命現象のありのままの姿をとらえることができれば、あらゆる生命科学分野に貢献できます。現在では生物五界説で示される生物個体全体を含め、医学上の病理標本なども観察可能になりました。これらの研究成果について紹介しました。

## サイエンスカフェ

文部科学省情報ひろば・旧庁舎1階ラウンジにおいて、浜松医科大学サイエンスカフェを開催しました。

### 第一弾

#### 「高真空環境で生命維持を可能にした秘密のお話」

- 日時:平成27年12月22日
- 講師:総合人間科学講座生物学 針山孝彦教授

### 第二弾

#### 「新しい顕微鏡技術によって見えてきたヒト組織の新たな姿」

- 日時:平成28年2月18日
- 講師:外科学第二講座 菊池寛利助教



## 浜松医科大学建学の理念

第1に優れた臨床医と独創力に富む研究者を養成し、第2に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、第3に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康と福祉に貢献する。

## 浜松医科大学の目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。

### 原稿募集

小誌をご覧になられた感想はいかがでしたでしょうか。読後のご感想やご意見をお寄せください。また、各欄(「研究最前線」「海の向こうで」「大学ニュース」「寄稿」「卒業生は今」など)への投稿や本学に関連する写真を、随時、募集しています。

職員や学生だけでなく、広く関係者の方々からのご提案をお待ちしております。誌面づくりに、ぜひご参加ください。

広報室 koho@hama-med.ac.jp

**編集・発行** 浜松医科大学ニュースレター編集委員会

**発行日** 平成28年3月1日

**お問い合わせ** 国立大学法人浜松医科大学 広報室  
〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山一丁目20番1号  
TEL.053-435-2111(代表) <http://www.hama-med.ac.jp/>

## 編集後記

今号のNEWSLETTERには定年を迎えられた教員、職員の方々と共に、6年間にわたり浜松医科大学を率いてこられた、中村学長および理事の先生方の退職に向けたお言葉を掲載させていただいております。これまでのご尽力にただただ感謝の意を表すのみです。

これからの浜松医科大学のさらなる発展を今後ともNEWSLETTERでご報告しなければ、とあらためて思うのでした。

ニュースレター編集委員 H.N.